

〈研究ノート〉

ブラジルにおけるスペイン語

坂 東 省 次

日本で唯一のスペイン語新聞インターナショナルプレスは今年になって、ブラジルにおけるスペイン語ブームに関する記事を何度か掲載しているが、2003年8月16日付の同紙上にこんな記事を見る機会があった。タイトルは「巨人がスペイン語を学ぶ」である。

ここでいう「巨人」とは南米大陸の半分を占める大国ブラジルであるが、さらにこんな内容が続いている。

「将来、歴史学者が21世紀初頭のラテンアメリカで最も重要な出来事は何であったか質問されるとき、その多くはブラジルがスペイン語を第二言語として採用したことであると回答するだろう。」(同、8頁)

スペイン語つまりスペイン語話者としてのスペイン人が最初にブラジルに到着したのは一体いつのことだろうか。ラテンアメリカ協会編『ラテンアメリカの歴史』(中央公論社、1964年刊)を見ると、発見後のブラジルに定住したスペイン人のことに触れている箇所がある。

「なかには、難船したポルトガル人やスペイン人がそこに漂着したまま定住していて、後に植民地をつくるときの足場になったフェイトリアもあった。」(同、174頁)

ついでブラジルに渡ったスペイン語話者は、スペインから追放されてポルトガルに避難したスペイン系ユダヤ人である。彼らはポルトガルに避難したものの、ポルトガルでも追放の身となり、多くはオランダに渡り、その一部がブラジルに渡ったのであった。しかし、スペイン人が組織的にブラジルに渡るのは、19世紀の到来を待たねばならなかった。

1888年から1930年までの間にブラジルには400万以上の移民があった。このうちスペイン人は12%を占めたといわれる。19世紀後半、スペインは深刻な経済危機に見舞われ、国内の低開発地域であったガリシアとアンダルシアから多数の移民がラテンアメリカに渡り、その一部がブラジルを移民先にしたのであった。彼らはコーヒー農園で奴隷に代わる低賃金労働力として雇われたという。多くはブラジル南部と南東、とくにサンパウロ州に集まった。その子孫は現在も生きており、12万を数えている。

ブラジルの人口は161,790,000人。巨大なブラジルの中であって、スペイン人移民の数は微々たるものである。ブラジルは今、スペイン語ブームの真っ只中にある。しかし、アメリカ合衆国

におけるスペイン語ブームの中心がヒスパニック（あるいはラティーノ）であるのに対して、ブラジルのスペイン語ブームはスペイン人移民とは関係のない、ブラジル人社会で起こっていることなのである。

ブラジルで公式にスペイン語教育が始まったのは、1934年のことである。この年ブラジルの大学に哲文学部が創設され、そこで公的にスペイン語とスペイン・ラテンアメリカ文学の教育が開始したのであった。しかしブラジルの外国語教育は長年英語とフランス語が中心で、スペイン語の出る幕はなかったと言っても過言ではない。

そんな状況のなかで、およそ7年前からブラジル人の中でスペイン語への関心が高まり、今や「ブーム」と言われるほど、スペイン語学習者が増加している。フランシスコ・モレノ・フェルナンデスは論文「ブラジルにおけるスペイン語」（セルバンテス協会編『世界のスペイン語』2000）の中で、ブラジルにおけるスペイン語ブームの理由として、1）メルコスール、2）スペイン企業の進出、3）スペイン文化の重さの3点を挙げている。

1) メルコスール（南米南部共同市場）

1995年1月、アルゼンチン、ブラジル、パラグアイそしてウルグアイの4カ国の間に、域内関税の原則撤廃と域外共通関税を実施する関税同盟が発足した。これにより人口2億、国内総生産が合計7,200億ドルの自由貿易圏が誕生したが、加盟国は成功の鍵を相互理解に置き、共通語としてスペイン語をあげている。

2) スペイン系企業の進出

従来、ブラジルに進出していた外国企業はアメリカ合衆国とドイツであったが、近年はドイツに代わってスペインの進出が顕著になり、今やアメリカに次ぐ第二位を占めている。スペインにとってブラジルはアルゼンチンに次ぐ重要な輸出国なのである（アルゼンチンが経済危機に陥った今、ブラジルの存在はますます重要になるであろう）。

3) スペイン語文化の重さ

近年の国際社会におけるスペイン語圏文化、たとえば音楽や文学の躍進は著しい。ブラジルでもスペイン語を含むスペイン語圏文化への関心は高まる傾向にある。

ブラジルとウルグアイの国境地帯には、国境語という混成語が話されている。ウルグアイのスペイン語話者はポルトガル語の影響を受けたスペイン語を、またブラジルのポルトガル語話者はスペイン語の影響を受けたポルトガル語を話している。スペイン語を混ぜて使用するポルトガル語はポルトニョールと呼ばれる。

ポルトガル語はスペイン語、フランス語、イタリア語などとともに同じロマンス語であるが、なかでもポルトガル語とスペイン語は言語的に近い存在だといわれる。スペイン語話者とポルト

ガル語話者がそれぞれが自分の言語を話してもお互に通じると思われるが、いかがなものだろうか。

従来、ブラジル人はスペイン語話者に対してポルトガル語かあるいはポルトニョールを使用してきた。これまではそれでスペイン語話者と完璧に相互理解が可能だと信じてきたが、実際はコミュニケーションが十分に行われておらず、誤解が生じていたということが分かってきた。こうした状況を背景に、共同市場が発足してスペイン語がますます重要になる中で、ブラジル人は外国語としてのスペイン語の学習を本格的に始めたのであった。

従来、ブラジルでは、外国語教育には第一に英語が、次いでフランス語が選択されてきたが、今やブラジル人が英語に次いで選択する外国語は、フランス語からスペイン語に確実に推移している。しかし、そんな中で明らかになったのは、スペイン語教師の不足に他ならなかった。

現在、ブラジルの国会では、初等・中等教育でスペイン語を必須科目に採択するか否かで議論のま最中である。12月には結論が出るようであるが、仮にスペイン語が必須科目になれば、5千万以上と言われる15歳以下の生徒がスペイン語を学校で学ぶことになり、その場合、20万とも25万とも言われるスペイン語教師が必要になる。これだけの数のスペイン語教師を果してブラジルで調達可能なのだろうか。

ブラジルでは現在、スペイン語教育機関が学習者であふれているという。しかし、学習者はスペイン語を学ぶ人ではなくすでに教えている人であるという現象が生じている。それほどスペイン語教師の養成が急を要しているということであるがそれはともかく、数多くのスペイン語教育機関の中でも、スペイン語教師の養成機関として期待されているのは、ブラジル・セルバンテス協会である。

1992年にスペインで設立されたセルバンテス協会は、今や世界の25カ所にセンターを開設しており、各地でスペイン語とスペイン語圏の文化の普及に力を注いでいる。ブラジルもまた例外ではないが、ブラジルでは、スペイン語教師の養成機関としても重要な役割を果そうとしているのである。

ブラジルはスペインはいうまでもなく周辺のスペイン語諸国からいまさら孤立することは出来ないだろう。スペイン語が世界的にますます重要になり、またスペイン語諸国との経済関係や文化交流の緊密化の進む中で、ブラジルは冒頭の引用文のように、スペイン語を第二言語として採用し、ラテンアメリカ18カ国のスペイン語諸国とスペイン語言語共同体を構築することこそ今後の歩むべき道ではないだろうか。スペイン語教師調達の課題も、スペイン語教材など資金面の援助も含めて、スペイン語世界との関わりの中で、解決するのではないだろうか。

参考文献

Aparecida Duarte, Cristina

1998 “Breve panorama de la enseñanza del español como lengua extranjera”, CUADERNOS CERVANTES 20, pp. 40-44.

Da Silva Venancio, María Thereza

1996 “Elegir lengua extranjera: relato de una experiencia en Brasil”, CUADERNOS CERVANTES, julio-agosto, pp. 47-50.

Eres Fernández, Gretel M.

1999 “Ser profesor de español en Brasil: ventajas y problemas”, CUADERNOS CERVANTES 24, pp. 10-17.

Ministerio de Educación y Ciencia

“La enseñanza del español en Brasil”, pp. 40-44.

Moreno Fernández, Francisco

1992 “La enseñanza del español como lengua extranjera”, En Marqués de Tamarón (dir.): *El peso de la lengua española en el mundo*, Valladolid, Secretariado de Publicaciones de la Universidad de Valladolid, pp. 195-233.

Moreno Fernández, Francisco

2000 “El español en Brasil”, *El Español en el Mundo* (Anuario del Instituto Cervantes), Instituto Cervantes, pp. 197-227.

Oppenheimer, Andrés

2003.8.16. “El gigante aprende español”, *International Press, Semanario en español*, p. 8.